

熱田神宮桐竹会創立80周年記念

熱田の杜演奏会



第一部 太鼓 熱田神宮太鼓教室

第二部 雅楽 熱田神宮桐竹会

熱田神宮桐竹会

〒456 - 8585 名古屋市熱田区神宮1丁目1番1号

TEL 052(671)4152 FAX 052 (671) 0421

熱田神宮ホームページ <https://www.atsutajingu.or.jp>

～ごあいさつ「熱田神宮桐竹会」～

熱田神宮桐竹会は、熱田神宮の舞樂神事ぶがくしんじや恒例の祭典に雅樂を奏でる奉仕団体で、昭和19年に結成されました。そして今では、愛知県・三重県・岐阜県より、熱田神宮を崇敬し、且つ雅樂の奏法技術に熟達した約50名の会員が集い、日々神明奉仕に励んでいます。

その奉仕姿勢は厳格な上に雅やかであり、更なる技術の向上を図るため、日々の研鑽は基より、毎年宮内庁楽部より楽師の先生をお招きし、ご指導を仰いでいます。

さて、こうした活動を通じて日本古来の伝統音楽である雅樂の保存と普及に努める我々桐竹会は、今年設立80周年という節目を迎えました。本日の奉納演奏会は、この周年を記念する事業の一環として開催されます。熱田神宮に流れる悠久の歴史の一端を担う誇りを胸に、これまでの歩みの成果をご覧いただきたく思います。どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

～雅樂「管絃樂と舞樂」～

雅樂はその起源系統によって「国振歌舞くにぶりのうたまい」「大陸系の樂舞がくぶ」「歌物うたいもの」と三種類に分かれます。「国振歌舞」は、上代の神樂であり、東遊あづまあそびや大和歌やまとうた、久米歌くめうたなど日本古来の歌謡に基づき、平安時代に今日の形に完成した声樂。「大陸系の樂舞」は5世紀頃から9世紀初めまでの約400年間に亘って支那大陸や朝鮮半島を経て我国に伝来し、アジア大陸諸国の音楽舞踏に基づいて平安時代に完成した器樂と舞。「歌物」は雅樂器の伴奏で歌われるようになった声樂で、民謡を歌詞とする催馬樂きまがらや漢詩を歌詞とする朗詠ろうえいがあります。

そしてさらに「大陸系の樂舞」は、大陸から伝来した唐樂とうがく、朝鮮半島から伝来した高麗樂こまがくに分かれます。高麗樂は、舞を伴う音楽である「舞樂」という形式のみですが、唐樂は「舞樂」のほかにも、舞を伴わない器樂合奏である「管絃樂」の形式が伝承されています。「管絃樂」と「舞樂」では樂器の編成が異なります。また同じ楽曲でも、「管絃樂」に比べて「舞樂」のほうがリズムを重視した演奏をします。

～ 熱田の杜演奏会 ～
プログラム

◎日 程 令和6年9月7日（土）

◎演奏曲目

《第一部》 午後3時より ～ 太鼓 熱田神宮太鼓教 ～

《第二部》 午後5時より ～ 雅楽 熱田神宮桐竹会 ～

国歌 君が代

歌詞は10世紀初めに編纂された『古今和歌集』に収載の短歌が^{もとうた}原歌とされ、現在の歌詞と同様の歌は平安時代末期に見受けられます。祝賀の歌として、和歌・文学や謡曲・小唄・浄瑠璃・琵琶歌等の諸芸能に取り入れられ、永く広く人々に愛されました。

明治時代初期、^{おおやまいわお}軍人大山 巖が日本国歌の必要性から君が代を国歌として提案。曲は当初のものから改められ、明治13年（1880）に^{れいじんちようはやしひろもり}宮内省楽部伶人長 林 広守の作曲として発表され、今に至ります。雅楽^{やがく}越調の旋律で、荘重かつ簡潔な名曲です。

管絃楽 ^{ばんしきちょう}盤渉調 ^{ねとり}《音取》

音取とは一種の音あわせの意味を持ち、雅楽の六調子（^{いちこつちょう}吉越調・^{ひょうじょう}平調・^{そうじょう}双調・^{おうしきちょう}黄鐘調・^{ばんしきちょう}盤渉調・^{たいしきちょう}太食調）全てに配されています。短いながらも、音階や旋律法が巧みに取り入れられ、その調子の持つ音楽的特徴を味わい知ることができます。

^{ばんしきちょう}盤渉調 ^{はくちゅう}《白柱》

^{とくかんし}別名に《徳貫子》^{じじよし}《児女子》ともいいます。元明天皇即位に際し作曲されたともされていますが、定かではありません。

ばんしきちよう せんしゅうらく
盤渉調 《千秋楽》

後三条天皇の大嘗会に、当時笛の名人で風俗所預の役目にあった源頼能が勅命によって作られたと伝えられています。一説に唐代の開元年間8月5日の千秋祭に作られた曲ともいいますが、日本で作られた曲と考えるのが妥当で、古来この曲は法会での衆僧の退出楽や宮廷での退出音声などに奏される習わしとなってきました。

神楽 《みつるぎ》

平成6年、熱田神宮桐竹会創立50周年を記念して作られた神楽で、作歌・作曲・作舞はそれぞれ、元熱田神宮宮司岡本健台・元宮内庁楽部首席楽長の東義文隆・同楽部隊長の藺広青によります。本日は、巫子4名が舞います。歌詞は以下のとおりです。

ちよろづ 民の祈りに まさやけく いはよ照り坐す みつるぎ かげ
「千萬の 民の祈りに まさやけく いはよ照り坐す 御剣の光」

舞楽 《とうてんらく》 ひらまい
《登天楽》 平舞

平安時代の初期に我が国において作舞されたと伝えられていますが、起源は詳かではありません。登殿楽とも書きます。舞人は鳥甲を被り、襲装束を著け、袍の右肩を袒ぎ、順次舞台に昇ります。

舞振りは優雅で、曲名の由来ともいわれる、舞人が舞台の前と左右両隅で双手をあげ、天を仰ぐ姿が特徴的です。

りょうおう はしりまい
《陵王》 走舞

古代中国北齊の將軍“蘭陵王長恭”は、大変顔が美しく、戦の最中であっても味方の兵士が見とれてしまうほどでした。士気がさがることを恐れた將軍は、いかめしい面をつけて周を攻め、勝利をおさめました。これを祝してこの舞が作られたと伝わっています。本国にわたってきた時期は不明ですが、一説には林邑の僧仏哲が伝えたともいわれています。

金色の桴を手に、舞台を縦横無尽に駆け回る様は実に勇壮です。

らくそん
《落蹲》 走舞

雌雄の竜が楽しげに遊ぶ姿をかたどった舞《納管利》を1人で舞う場合、《落蹲》と称されます。この舞は印度で作られ、支那を経て我が国に伝えられたといわれています。平安時代に、競馬や相撲の節会など勝負事に際し、陵王と共によく奏されました。

竜の顔を模した面をつけ、銀の桴を持って舞います。